

心の輪を広げる体験作文

【中学生区分】最優秀作品

千葉大学教育学部附属中学校 一年

誰もが個性を見いだせる時代に向けて

青木 さら

私の幼なじみに障害のある男の子がいる。彼は私が通う小学校の特別支援学級に入学し、学校行事などで会う事が多かった。その行事の一つであるなわとび大会での出来事だった。なわとび大会では大縄を飛んで他の学級の人と交流するというものだが、私の班には彼がいて、正直彼はきつと飛ぶことが出来ず、私たちの班は他の班と比べて全然ダメなんだろうなと思ってしまった。

なわとび大会の本番の日。彼は笑顔で校庭にやってきた。開始五秒前のアナウンスがあり、それと同時に彼の表情は真剣な表情へと変わった。そして彼の飛ぶ番になり、彼は軽々と縄を飛んだのだ。

私は今まで、「障害者」という言葉がつくだけで私たちが普通にできることが出来ないものだと勝手に思っていた。それは違う。そう知ったのだ。

この出来事から、「障害」について興味を持った。一口に「障害者」といっても、様々な名前があり、人によって症状も違い、それと向き合うにはたくさんの努力が必要だと知った。でも、これだけでは「障害」について理解できたとは到底言えない。そこで福祉作業所に通う障害を持った人が開いたゲーム大会に参加した。初めての体験に少し緊張したが、しばらくすると打ち解けていき、まるでいつも会っていたかのように仲良くなることが出来た。これに加えて、インターネットなどには、障害を乗り越えて活躍する人たちが、障害と共に生きながらも様々な才能を見出している人たちがたくさんいて、今まで私が思っていた「障害者」とはまったく違うことが理解できたのだ。

実際に私の身近な人たちにも障害者に対する考え方が間違っている人がたくさんいた。このままではいけないと思う。これでは誰もが個性を見い出すことができる空間にはなっていないと思う。自分が勝手に思っている偏見があるせいで個性を表すことのできない人がたくさんいると思う。

そんな偏見や差別を無くすためにも、障害を持っている人との交流は大切だし、貴重なことだと思う。みなさんも、今一度、障害者への思いや態度を見直してみてはどうだろうか。